

第2回北海道開発の将来展望に関する有識者懇談会 議事要旨

1. 日時:平成 26 年 3 月 10 日(月) 13:30～15:30
2. 場所:中央合同庁舎第2号館共用会議室 2A・2B
3. 出席者:[委員]田村座長、石田委員、上村委員、小磯委員、高橋委員、千葉委員、中嶋委員、林委員、古屋委員
[オブザーバー]北海道、北海道経済連合会、北海道商工会議所連合会
[国土交通省]関北海道局長、岡部審議官、小西審議官 他

4. 議事次第

- (1) 開会
- (2) 議事
将来展望と課題について
その他
- (3) 閉会

5. 議事及び主な発言内容

- ・ 資料3及び4について事務局から説明が行われた。
- ・ 上村委員からのプレゼンテーションが行われた。

【上村委員プレゼンテーションの要旨】

- ・ 高齢化及び過疎化に起因して除雪が困難となり、豪雪地帯における転落事故など死傷者が増える傾向にある。自助も共助も困難となっており、力を合わせるしかなく、協働、新しい公共という発想が必要になっている。それでも足りないところをボランティアに頼ることになる。
- ・ 平成18年豪雪をきっかけに始めた除雪ボランティア「雪かき道場」は各地へののれん分け(技術移転)が進み、日本海側と太平洋側の交流の一つのチャンネルになっている。北海道は「雪はねツアー」が活発で、互いに切磋琢磨している。豪雪地帯以外の雪が珍しい人を受け入れることで、地域防災の契機となり、また、エコツーリズムなどの広がりもある。
- ・ 雪の冷房利用、冷蔵利用は外部からのエネルギー供給も不要であり、構造が簡単であることや、除湿、空気清浄、農産物の食味も増すなどの利点もあり各地で増えてきている。鮮度保持だけでなく豚舎の脱臭など、農業生産分野で可能性がある。冷房の初期投資は課題だが、雪冷蔵は、ヒートポンプと比較して価格競争力も見えてきた。
- ・ データセンターにおける冷却への検討も進んでいる。こうした施設は電力を要する。北海道

において電力が安いという状況を作れば、様々な産業が北海道に立地するだろう。

- ・ 高橋委員からのプレゼンテーションが行われた。

【高橋委員プレゼンテーションの要旨】

- ・ 交通とは時間や生活の豊かさをもたらすものであり、北海道では冬期のモビリティ確保、交通の安全が大きな課題。そのためには安全で、かつ、時間信頼性のある高規格な道路が基本。
- ・ 道東では地球温暖化の一環で今後も積雪量が増加傾向となるメカニズムの研究がある。道路の防雪柵に対し斜めに風雪が当たっている場所があり、風向等の調査を進める必要がある。調査の結果、風向が道路と平行になっている区間もあり、ルート変更も検討する必要がある。
- ・ 道の駅を防災拠点として活用すべきで、マンパワーや機材等の課題に取り組む必要がある。
- ・ EV(電気自動車)については、1日に200kmくらい走るとなると北海道の観光行動特性も踏まえた充電機の整備が課題である。
- ・ 道路の整備・管理でインフラマネジメントの取組をしているのか、マーケティングの発想やユーザーに我慢を強くないという視点が必要である。

- ・ 中嶋委員のプレゼンテーションが行われた。

【中嶋委員プレゼンテーションの要旨】

- ・ 農業政策が大きな転換期にあり、北海道農業にとっても転機である。さらに構造改革が進むと地域によっては全体が疲弊してしまうことが懸念される。また、人のアウトソーシングを進めすぎると、コミュニティの崩壊も懸念される。農林水産業・地域の活力プランにある飼料米の生産については、フィードチェーンに課題がある。
- ・ 人口減少により農業へ需要面・労働力の面へのインパクトが大きい。人口減少だけでなく、社会構造にも大きな構造変化が起こっており、すでに食料への支出は1995年を境に減少している。
- ・ 北海道の農業は地域特性が大きく、道央は米、道北北部や釧路・根室地域は酪農がほとんどである。食品加工業との取引関係は、各6地域の内部か道外相手が多く、道内6ブロック間の連携政策が必要。
- ・ 農業の土地生産性に関して100万円/haの壁を越えるためにIT農業など改革が必要である。
- ・ 北海道は大規模経営で法人経営が多いものの、今後は都府県もライバルになってくる。また、北海道も畑作や稲作は補助金で黒字になる構造であり、米政策に注意が必要。

- ・ 3委員のプレゼンテーションを受けて、質疑応答が行われた。

【上村委員プレゼンテーション関係】

- ・ 北海道で除雪ボランティアの研究会を主導しているので、活動の紹介をしたい。昨年のボランティアツアーも4地域で200名を集めたが、今年はさらに拡大して6地域となった。企業のCSRや研修に活用されていることと、ボランティアツーリズムの需要が拡大していることが要因である。都市と地方の交流関係について単に観光ではない動きが生まれている。
- ・ 北海道以上に大都市の高齢者の問題が深刻である。人数以上に質的な問題があり、大都市ではコミュニティが成立しておらず、ボランティアの受け入れもできないという問題がある。そこで、大都市の元気な高齢者に向けて、地方のボランティアの機会を提供し、地方との関係を元気にうちに構築してもらうということが考えられる。交流人口から連携人口と捉え直す。そういうことが打ち出せないか。
- ・ 北海道の物流の特徴として、片荷輸送の問題があるが、その解決のためにバッファとしてのストックポイントを作る必要があり、雪室は有効である。だが、施設整備まで手が回らないのが実情だが、新潟ではどのように解決しているのか。
- ・ まともにやったら収支が合わないのがこの世界であり、除雪の際に雪を捨てさせてあげるという組み合わせで雪を手に入れることが考えられる。
- ・ 都市と地方が防災協定を結んだことをきっかけに除雪ボランティアでもつながりができている。都市の問題を都市だけで考えないことが大事である。
- ・ 例えば停電の日など、災害発生時と同様の状況を作り出す(プチリスク)など、リスクへの意識喚起やコミュニティが形成されるような仕掛けも必要ではないか。

【高橋委員プレゼンテーション関係】

- ・ ホワイต์アウトの際、路側の位置が分かるようなナビゲーション技術の搭載、雪に埋まった際に車から位置を発信する機能が北海道らしいEVの機能として期待される。電池容量の問題はあるが、EVならば一酸化炭素が発生しないので、雪に埋まっても動力を止める必要がない。
- ・ 道の駅は地域への経済貢献はすごいが、情報発信・防災機能の充実が進まない理由は、指定管理者は採算を重視するので、金がかかるだけのことはやろうとしないからである。
- ・ 道路のマネジメントについては大空町に建設会社との包括契約の事例があるが、どのような理由で他に広がらないのか。ローカルルールを新しい北海道モデルとして特区も目指して提案していくことが必要である。
- ・ 防雪柵に対し風雪の方向が垂直でない問題について、厚みのある防雪林などの新しい方向では対応できないのか。
- ・ 防雪柵が斜めでは風が通ってしまうし、防雪林の育成には時間がかかる。だが、今の段階ではまず風向を含めて調査を進めることが必要と考えている。

- ・ EVとご指摘のITSを一緒にした展開も含め、新しい車両開発技術を北海道発でやっていくことは重要である。
- ・ 道の駅の活用は何とか形にしたい。また、北海道の道路マネジメントにうまいネーミングを付けて展開していくことを考えている。

【中嶋委員プレゼンテーション関係】

- ・ 農業形態の地域特性については、道東や道北では気象条件が厳しく、酪農しか成り立たない事情があることに配慮が必要だろう。
- ・ 例えば漢方薬の原料やワインの生産という動きがある。収入増になる新しい農業を考えていく必要がある。
- ・ 北海道の地価の安さは魅力である。
- ・ 釧路の酪農地帯では、農業の問題とともに地域の維持の問題が切実である。酪農経営がうまくいっていても、担い手がいない。農業地域を維持するためには幅広い産業が必要である。浜中町では、浜中農協が厚岸町の一部区域に対する支援をするなど、地域間連携の事例もある。
- ・ 北海道の食品加工業が地域の農水産物を使わなくなってきているが、地域間連携を高めていくこともこれからの農業地域政策の方向性である。
- ・ 農林水産業・地域の活力プランは2020年を目標年次としているが、もう6年しかない。2050年くらいを見て考えていかなければならないと思うが、そのような長期的な農業の展望に係るご見解を伺いたい。
- ・ 日本酒もかなり可能性がある。付加価値を高めて道外に出していく必要がある。ワインについてはもう少し勉強したい。
- ・ 北海道ではJAも広域合併しないで活動しているところが多い。境界を越えた活動をもっと進めるべきと考える。
- ・ 5年、10年先だけを見ている政策立案には限界があり、農林水産省にも30年先を見ながら基本計画を立案すべきだというお願いをしているところである。
- ・ 人口減少が一番大きな問題であるが、農業用水の維持管理や自給飼料の生産システムなどについて技術や組織を改革し、対応していかなければならない。

・委員による質疑の終了後、オブザーバーからのコメントがあった。

- ・ 雪室は食料備蓄のバックアップ拠点として機能するのではないか。
- ・ 団塊の世代が後期高齢者となる2030年代が問題である。
- ・ 山梨の雪害においてコンビニが機能したと聞いている。コンビニや道の駅が社会のインフラとして機能するのではないか。
- ・ 連携の前に競争することも重要ではないか。北海道はこれまで、その土地柄から競争の機会が少なかったと思うが、競争により自分の力、相手の力が見極められ、その結果、真の

連携が生まれるのではないか。まずは道内の地域間競争・連携からはじめ、そこから道外へとステップアップしていくのがよいのではないか。

- ・ 自分の身の安全と業務の遂行の優先順位などリスク認知・感覚のバランスが崩れている人たちによって災害が拡大しているという面があり、プチリスクの取組は興味深い。
- ・ 人口減少下にあっても持続可能な地域づくりを進めていかなければならない。道としては我が国全体にどう貢献していくのかの観点からも取り組んで行きたい。

- ・ 以上の議論を踏まえ、総括的な発言がなされた。

- ・ 都市と農村、地域間の連携の話題が出た。また、経営的視点や実行の仕組みの話が出た。
- ・ 議論が不足していたのは、技術革新や、農村地域の土地利用。特に人々の集積をどう誘導していくのかは課題である。

- ・ 資料5について事務局から説明が行われた。

(以上)

(速報のため、事後修正の可能性があります。)